

平成 29 年度 東京未来大学入学式学長式辞

入学おめでとうございます。皆さんを歓迎いたします。そして、ご臨席いただきましたご家族のみなさまに心よりお祝い申し上げます。

皆さんは今日から、東京未来大学を築いていく大学の重要なメンバーです。大学には、大学生である皆さん、授業等を担当する教員、そして総合的な学びを支援するキャンパス・アドバイザー(CA)、職員がいます。それぞれが大学を築いていくために欠かせない人材なのです。その自覚を持って、将来を見据えた大学人となってください。

学ぶことは自分を築き、社会を創ること

皆さん 「学ぶ」とはどのようなことだと思いますか？ 多くの人は、知らないことを知ること、何かを解決するヒントを得ることと「知識」を得ることだと思っているのではないのでしょうか？ それも学びの一つであることは否定できません。しかし、この先の学びでは、分からないことが分かることもあります。そんな妙なことがあるのだろうかと思う人もいるかと思いますが。

オープンキャンパスでの模擬授業や入学前のゼミナールでは短い時間でしたので、気づき始めたかどうかは定かではありませんが。大学での学びとは、決して教科書を読み進めて皆が同じ一定の正解を得ていくというものではありません。用意された答えを探すのではなく、答えの探し方を先ず探すためにはどうするのか、ひいては、答えを求める前提である問い自体を考えることが答えになることに気づくことが目標になるのです。

世の中には、探せばどこかに答えがあるとは限りません。場合によっては、すぐ目の前に答えがあるにもかかわらず気づかないでいることもあります。いつもの当たり前の事柄に囲まれていると大事な答えを見出す感受性が鈍くなっていることもあります。少し見方を変えるだけで見過ごしていた問題、答えが浮かびあがることはあるのです。

大学では、自分で考えることを旨とします。開講される科目も高校時代とは大幅に異なります。当初は途惑うこともあるでしょう。授業では、高校までのように、教科書の重要事項に下線を引くよう指示されたり、教員が板書をする文章を書き写すこともほとんどありません。しかしながら、高校での学びを前提にしています。教科書や参考書を事前に読み、考えてください。授業時にはそれを踏まえながら、教員は解説を加え、教科書の内容を補強したり、発展的に考えられるヒントを示すでしょう。そして、自らの体験や社会事象と照し合わせ、クラスメートと話し合い、自分一人の考えから社会的な知恵に発展するように授業は進むことでしょう。指示がないとノートにメモできないというのでは困ります。聴きながらノートを取る習慣をぜひ身に付けてください。そうすると、後で振り返って考えるきっかけはたくさんあり、次の授業にしっかりとつながります。

本学の特徴ですが、皆さんの周りには、教員、CA、先輩学生など幾重にもサポートする人々がいることを忘れないでください。とまどいが生じたら、どこがどうよく分からないかも含めて遠慮なく、ぜひ誰かに声をかけてください。

学びは、皆さんの可能性を益々押し広げます。分からないことをそのままにしておくと、せっかくの可能性も花開きません。自分に注意を向け、得手不得手を知り、磨かなければ、現実のものにはなりません。

人は自分をよく見せようとしがちです。ですので、不得手なこと、あいまいなことをなかなか人に示したくない。そうすると周りからの適切な忠告も受けられなくなります。結果的に自分の能力や適性に気づきにくくなります。先ずは、素直になり、「自分」に気づくことから始めましょう。

人は他人と比べて、自分の特徴と他人の特徴との異同が分かります。同時に、自分の特徴を相手と比べながら理解し合うことができます。自分の意見が、独り善がりのものか、妥当なものかも、他人からの評価と照らし合わせて分かるものです。

この意味でも、成長したいという目的を同じくする仲間がいるこの大学において、様々な人間関係を活用してください。

スタートアップ・セミナー

4月3日からの三日間に渡って行われたスタートアップ・セミナーは如何でしたか？ 朝早くから多くのプログラムが連続していたので、疲れたことと思います。密度の濃い時間とはこういうものかと感じたことでしょう。

「大学に入ったら、のんびり出来ると思っていたのに。」と思っていた人がいたなら、それは違います。大学は自分を磨くところなのです。

だからといって、皆さんの時間を間断なく大学がお膳立てするという意味では全くありません。皆さんの考えの幅を広げる、将来を見通せるための手がかりを提供するのが東京未来大学の役割だと考えています。せっかく本学に入学されたのです。本学では皆さんが成長できるように仕向けたのです。

この三日間で、大学の授業に能動的に係わるとはどのようなことなのか、大学での学びの内容も方法も多様であることなど、大学ではどう学ぶのかの少しのヒントを得たはずです。

また、昨年十二月と今年二月の入学前ゼミナールに参加された人には、講義を聴いてノートを取る、文章の要点をどう捉えるのかについて学んでいただきました。これも大学での学びを具体的にイメージできた大事な準備だったのです。ぜひ、明日からの授業ではそれを活かしてください。

大学の授業では、能動的に関わり、よく咀嚼しなければ扱われたエッセンスを活かせません。また、複数の授業で得た知識や考え方を組み合わせることによってこそ新たな発想や工夫ができるのです。基礎の科目、専門科目と学内のプロジェクトが相乗的に皆さんの大きな成長をもたらします。

本学の小史

東京未来大学は、平成十九（2007）年に開学し、四月から十一年目に入りました。

こども心理学部（こども心理専攻、こども保育・教育専攻）では三月で七期目の卒業生が巣立ちました。安定した高い就職率（97.5%）であり、卒業生を採用していただいた保育園・幼稚園や企業等から高い評価を得ています。心を大事にする卒業生が活躍していることを大いに誇っています。

モチベーション行動科学部入学の皆さんは六期生です。三月に二期生が卒業しました。社会で活躍するための自らのモチベーションを高め、チャレンジ精神の旺盛な彼らが縦横に活躍してくれるはずです。

また、この三月で通学教育課程、通信教育課程の卒業生は2700名ほどとなりました。

事実を捉えることから大学での学びは始まる

本学の使命（ミッション）は、「教育・研究・社会貢献機能を通じて、人を活かし、世の中の困難を希望に変える」ことです。言い換えますと、「自らの学びを通じて、他人を蔑ろにすることなく、互いを活かし合う。そして、世の中に様々な困難がありますが、それをできるところから解決し、住みやすい満足できる社会を築くこと」を目指すことです。その方法は一通りではありません。大学生活を通じて自分にふさわしい方法を見つけ出してください。

また、本学の理念（ビジョン）は、「人の未来を、日本をそして世界を明るく元気にする」ことにあります。「学びを通じて、持続可能な満足できる世界を保障し、お互いを幸せにする社会を築く」ことです。これは抽象的な表現ですが、利己的ではなく、誰彼と分断的な関係を築くのではなく、相互に活かし合う共生社会を創ることを期待した表現です。これからの大学生活において、自分の理想とすることとよく結びつけてどう具体化していけるかを熟慮してください。

その際に大事なことがあります。世の中の事実を見据えなければなりません。事実・・・それは一つなのではないでしょうか？ 実は「事実にはいくつかの顔がある」ということに留意しなければなりません。

例えば、電車には優先席があります。優先席ですから、その席を必要とする人がいなければ誰が座っても構いません。自分よりもその席を必要だと思われる人がいるならば譲ればいいのです。混んでいる電車で、その席に、例1：見るからに健康そうな人が座っている。重そうな鞆をかかえ、目をつぶり、イヤホン越しに音楽を聞いている。例2：高齢と思える女性が二人買い物バックを持って話している。これだけでは座っている人の事情は分かりません。座っている人が妥当なのかどうか、座っている人物の様子（疲れていそうか、具合が悪そうなのか）をどう判断するか、また、社会習慣的に特定の人が座るべきと思っている人、あるいは、とにかく自分はすることがあるので座ると自分だけの解釈を優先する人もいることでしょう。この席の社会的意味をどう理解しているのかによっても判断は異なります。車内アナウンスがあっても、それ自体に注意を払っていない人もいます。

もっと一般化して言いますと、真実にはいくつかの顔があるのです。漫然としていては、真実は見えないし、気づかないでしまうことが多いものです。多くの場合は、他人を気遣うことができない／しないことが真実を見えにくくしているように思います。

人はほっとくと見えやすい、分かりやすい自分に心が向かいます。分かるという「感じ」は自分についてですから、ある意味当然なのです。だからこそ、敢えてhumanityからの視点を忽(ゆるが)せにしない努力が必要です。

いつもの自分の見方はどうなのか、敢えてふだんと違う見方をしてみたらどうなのかと試みる必要があるのではないでしょうか。

皆さん、夏目漱石の初めての小説「吾輩は猫である」をご存知だと思います。漱石没後百年を記念して朝日新聞では昨年4月から3月28日まで一年にわたり224回掲載していました。猫目線を借りた独特の設定は興味深いものです。当事者以外の目線からの叙述が随所にあります。

「人間の心理ほど解(げ)し難いものはない。この主人の今の心は怒っているのだから、浮かれているのだから、または哲人の遺書に一道の慰安を求めつつあるのか、ちっとも分らない。世の中を冷笑しているのか、世の中へ交まじりたいのだから、くだらぬ事に肝癩を起しているのか、物外(ぶつがい)に超然としてしているのだからさっぱり見当がつかぬ。」

ストレートに感情を表し、要求する猫と違って人間ってなんと素直でないことかと訝しがっています。自分がかっこよく見せたい、侮られないようにしようとするあまりいつの間にか心を偽ったり、隠していることへのもどかしさが語られています。でも、

「呑気と見える人々も、心の底を叩いてみると、どこか悲しい音がする。」
と、人間の心根の哀れさにも同情しています。

それでは、吾輩はどのようにして人間の心が分かるのでしょうか。

「吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れんが、このくらいな事は猫にとって何でもない。吾輩はこれで読心術を心得ている。いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。

ともかくも心得ている。

人間の膝の上へ乗って眠っているうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣をそっと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電気が起って彼の腹の中のいきさつが手にとるように吾輩の心眼に映ずる。」

ここまでのスキンシップは人間同士ではよほどの間柄にならないと許されないことですが、猫だから許されるのでしょうか。でも、人間も相手の懐に飛び込まねば分かりません。そのためには、素直に自分を表し、素直に相手に近づき、相手の気持ちを分かろうと聞き耳を立てることで、それは人ができることです。

(夏目漱石『吾輩は猫である』(1905~1906年、小説第一作)、1867年2月9日~1916年12月6日、享年四九歳)

通じ合える人と人

親しい人ほどお互いの気持ちがうつる(情動伝染)ことが分かっています。しかも、その際にはオキシトシンというホルモンが分泌されます。しかも、種を超えて同様なことが起こることが最近の心理学研究では分かっています。通常、親しい間柄では、相手の気持ちや行動の仕方がよく読めるからと思っています。しかも、動物との間でも起こるのです。その際には、「見つめ合う」(注意を向け

る)、「接触する」ことが重要とのこと。先ほどの「吾輩」の“腹にこすり付ける”こともその典型的なものです。ある実験では、友人が痛み刺激を受けるのを見ているだけでも当人が生じるのと同じ脳の痛み回路が賦活することが分かっています。友人が経験した痛みも、自分の痛みと同じように神経的に処理されるのです(亀田達也 2017、「モラルの起源—実験社会科学からの問い」 岩波新書)。おそらく、この辺りの研究は、さらに進むと、世界に起きつつある分離、分断傾向、利己的な自国利益優先の思いも解消されていくのではないかと期待しています。皆さんはどう思いますか？

実際には、他人を思いやる、共感することは決して簡単ではありません。他人の気持ちを相手自身の気持ちで押し量ることはできません。どうしても自分の「見方」で押し量ってしまいがちです。自分の見方イコール相手の見方となるような社会にはなかなかやってきません。だからこそ、近づく、分かるための工夫をしなければなりません。

「困難を希望に変える」ためには、どのような種類の困難であるかによって適切な手順があるはずです。大学での学びを通じてその手順を手に入れるための工夫の仕方を会得して、幸せな社会を築き、貢献できる人になることを期待しています。

大学生として期待する

大学で知識を得るだけでは物足りません。この先、どのような困難に遭遇するのか予想もつきません。ですから、問題を解決するために知識をどう使うのか、つまり、「考えることを学ぶ」ことが大事です。

考えるためには、基礎となる概念を知る(読む、調べる)。それを用いて考えたことを人に伝え、他人の考えと付き合わせる(討論・議論する)ことは必須です。自ら獲得し、他人に伝え、確かめるという習慣(これは、学びの社会習慣です)を身につけてください。

本学では、学びを社会で活かすことにつながる教育を旨としています。そのために入学当初からキャリア教育を重要なものとして位置づけています。世の中一人だけで解決できる問題はそうそうありません。インターンシップや実習で保育園・幼稚園、学校、企業等で実践的な体験をすることは「チームとしての学び」の機会になります。多くの方々の協力によってこそ、学びは成就します。そのためにも、考えるために有益な概念を理解し、確かめながら行動するよう心がけてください。

大学ではなすべきことは多々あります。でも、その先に、なりたい自分が待っているのです。仕方なくこなす課題と、自分の目標につながると思える課題とでは、モチベーションは異なります。意味がある、楽しいと捉えることによって、楽しくわくわくするものです。

大学生になって、人生の story を作ろう

皆さん個々人は、独自の個性を持っています。大学での学びは必ず皆さん自身の個人個人の story の骨太の柱になるはず。家族に由来し、人生でこれまで出遭ってきた人々、これから出遭う人々とのかけがえのないネットワークの中で皆は自ら創る story の主人公なのです。

皆さんには大きな可能性があります。本学において、自分の夢を思い切り描き、そしてその実現に邁進してください。誰にとっても未来は開かれています。試しもせずにあきらめることは“決して”しないでください。

皆さん、東京未来大学で、大学人同士互いに影響し合いながら、成長していくことを期待しています。入学おめでとうございます。

2017(平成29)年4月6日 学長 大坊 郁夫

大坊 郁夫